

齋藤 梓 「行政によるイベントの理想—大いなる平凡・フェスタ my 宇都宮を事例に一—」

週末のオリオンスクエアは一部の市民にとってはサークルや様々な活動の成果を披露する絶好の舞台である。しかしその他の人々には、非常にわかりづらく「また地域で自分が知らないことをやっている」と、市民の「自分がまちの一部である」という意識を損なうきっかけを生み出す場ともなる。多くの場合、私たちはそのイベントを誰が、どのような目的で行っているのかを感じられずに、出演者たちの満足そうな表情を見て、ただ「通行人」になるのみである。このようなイベントが混在する中で、誰にとっても公平であるべき行政が主催するイベントが、どのような地位をとるべきかについて、宇都宮市役所において「フェスタmy 宇都宮」の企画・運営に過去数年に渡り携わったA氏にお話を伺った。

「フェスタmy 宇都宮」は毎年4月1日の「宇都宮市民の日」に合わせて行われ、今年5月19日に実施された。その目的はA氏によると「市民が市民の手でまちづくりを行い、その発表の場と共に多くの市民に理解していただき、『市民主体のまちづくり』を広く啓発すること」である。以前はJR 宇都宮駅東口側のマロニエプラザ周辺で行われていたが、3年前から中心市街地にまで開催区域を拡大し、マロニエプラザ側との導線上を参加者が行き来するという、宇都宮市広域を巻き込んだ大規模なイベントとなった。200を超える参加団体が行う内容は「おまかせ」である。参加者は自由に屋台の出店やストリートパフォーマンスなどを行い、主催者側もご当地アイドルのミニライブなど目玉となる企画を持ち込む。近年では高校生などの若年層の団体による参加がみられるが、一方で「ベテラン」の団体の高齢化が問題であるとA氏は語っている。宇都宮市にはたくさんのイベントが存在するが、その中で「フェスタmy 宇都宮」は「富士山のように大いなる平凡」であるべきというのがA氏の主張である。

市民団体の高齢化などで担い手に変化が生じつつあり、また世代交代がうまくいかない団体では、若年層に向けた魅力的なアプローチが難しい状況である。まちなかに拠点を移したことで「リアルな層」の獲得が容易になったことから、そこへの対応も考える必要がある。また、A氏は「行政主導」を嫌うが、私はこれには反対である。なぜなら主催者が明確であることは参加者の安心に繋がり、「うちの役場はこんなにかっこいいことをやる」という感動は市民のまちに対する自信や誇りにつながるからだ。行政は「民間主導」の下に団体の活動を見守るだけでなく、積極的に魅力的な団体を探し、「スカウト」する必要がある。イベントに関しては「お役所仕事」を忘れ、パーティーオーガナイザーのように、人の欲に正直な楽しさや確実な集客に執着し、さらに市民団体の活動を支援しながらその両方が成立するよう、双方向のニーズに合った催しを行うべきである。

「フェスタmy 宇都宮」が、大いなる「平凡」であり続けるためには、時代の変化に応じて何が標準であるべきかを定め直す必要がある。さらにそれが「大いなる」平凡となることで、市内の他の団体が主催するイベントの質の向上につながり、その目的や、対象（一般の層に広く向けるのか、まちづくり団体やNPOに向けるのか、両方か）を明確にし、より良いイベントが生み出されていくはずだ。